

1 研究主題

学びをつくる学習者の育成（1年次）

2 主題設定の理由

（1）研究の背景と本校の課題

中央教育審議会の答申等で示されている通り、「令和の日本型学校教育」においては、多様な子どもたちを誰一人取り残さない「個別最適な学び」と、多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実による授業改善が急務とされています。また、本校においては、令和7年度の第2・3学年の複式学級化に続き、令和8年度には第4・5学年も複式学級となりました。こうした環境において、児童には「主体的に学習を進めていく力」と「友達と協力し合って学習する力」の育成がこれまで以上に求められています。

本校では令和4年度からの4年間、「自ら学びを創る子どもの育成」を研究主題に掲げてきました。その結果、対話を通して自分の考えを再構築する姿や、学習方法を自ら選択する力が育つなどの成果が見られました。一方で、「自分たちで見通しをもって学ぶ力」や「自らを批判的に振り返り次につなげる力」の更なる育成が明確な課題として浮かび上がりました。

（2）新主題に込めた願い：「学びをつくる学習者」とは

社会の変化が加速度を増し、予測困難な時代において、自ら学び続ける力は生涯にわたる基盤となります。これまでの成果と課題、そして未来を見据え、今年度の研究主題を以下の通りとします。

【新主題】 「学びをつくる学習者の育成」

本主題には、大きく2つの願いを込めています。

① 「創る」から「つくる」へ（共有と共創）

「創る」をひらがな表記にしたのは、教師だけの言葉にせず、子ども自身が「自分の学びをつくる」という感覚を、温かく親しみやすい形で共有するためです。子どもと教師が、学びをつくる姿について共に考え、目指していくことを大切にします。

② 「子ども」から「学習者」へ（支援とロールモデル）

「学びをつくる学習者」とは、自ら問いをもち、仲間と関わりながら試行錯誤し、学びの過程を自分で組み立てていく姿を指します。与えられた課題をこなすだけではなく、仲間との対話から新たな気づきを生み、失敗やつまずきを成長の材料として振り返ることができる存在です。同時に、この「学習者」には教師自身も含まれます。主体的に学び続ける教師の姿は、児童にとって最大のロールモデルです。子どもに一方的に教え込むのではなく、子どもが本来もつ“育とうとする力”を信じ、安心して挑戦できる土壌を整えること。すなわち「支援」を中心とした学習デザインへと転換し、子どもも教師も共に学びをつくり続ける学校を目指します。

（3）研究の具体：AARサイクルを基盤とした学習デザイン

これまでの課題であった「見通し」と「振り返り」を充実させ、子どもが自ら学びを動かす力を育む基盤として、AARサイクル（Anticipation：見通し → Action：行動 → Reflection：振り返り）の考え方を取り入れた授業改善を進めます。このAARの流れを踏まえ、次の3つの視点から授業づくり（学習デザイン）を行います。

① 学びの単元づくりの視点（Anticipation：見通し）

子どもが学びに向かいたいくなる“入口”をつくる視点です。魅力ある学習課題を設定し、単元の計画や身に付けたい力を子どもと共有することで、自ら問いをもって学びを始められる土台を整えます。

② 学びの場づくりの視点（Action：行動）

子どもが学びを深め、広げていく“プロセス”を支える視点です。自己選択・自己決定の場を設定し、仲間との対話を通して違いを受け止め合う学びの場をつくります。その際、思考の可視化や協働の促進に ICT を効果的に活用します。

③ 学びのサイクルづくりの視点（Reflection：振り返り）

学びを振り返り、次の学びへとつなげる“連続性”をつくる視点です。自分の学び方を批判的に見つめ直し、新たな問いを生み出すことで、次の Anticipation（見通し）へと向かう循環をつくります。

【二重の AAR サイクルで学びを確実なものに】

AAR は、1 時間でも単元でも回す“二重のサイクル”として機能させます。

① 小さな循環（1 時間の AAR）

「めあてをつかむ(A) → 学習活動(A) → 学びを振り返る(R)」というミニサイクルにより、「学びの習慣」をつくります。

② 大きな循環（単元の AAR）

「ゴール・学習計画の共有(A) → 問いを深める(A) → 成長の実感と次の問いへ(R)」という大きなサイクルにより、「学びの構造」をつくります。小さなサイクルの積み重ねが大きなサイクルを回す原動力となり、子どもたちの「生涯にわたって学び続ける力」の育成へとつながっていきます。

（４）「育成」のとらえ

本研究において、「育成」とは、子どもが本来もっている「自ら育とうとする力」を信じ、その力を引き出して伴走する「支援のプロセス」とであるととらえます。具体的には、以下の３つの視点で「育成」をとらえ、日々の教育活動を展開します。

① ゆるやかな「手放し」と自己調整の支援

はじめからすべてを子どもに委ねる「放任」ではなく、発達の段階や実態に応じて、教師が AAR サイクルの回し方をモデルとして示し、適切な足場かけを行います。経験を重ねる中で徐々に学びの決定権（選択肢）を子どもに委ね、最終的には子ども自身が「自分の学びのハンドル」を握り、自己調整しながら学びを進められる状態へと導くことをめざします。

② 「失敗」や「つまずき」を成長のきっかけとする風土の醸成

自ら学びをつくる過程において、回り道や失敗は欠かせない要素です。これらを「避けるべきネガティブなもの」としてではなく、Reflection（振り返り）を通して次の Anticipation（見通し）を生み出すための「きっかけ」として肯定します。子どもが安心して挑戦し、つまずきを仲間と共有できる、心理的安全性の高い土壌を育むこと自体を育成の重要な一部と位置づけます。

③ 教師自身も「育ち合う」共創の姿勢

（２）で述べたように、教師自身もまた一人の「学習者」です。子どもを「育成する対象」としてのみ見るのではなく、教師自身も子どもたちの姿から学び、自らの学習デザインを AAR サイクルで振り返り、改善し続ける姿勢をもちます。教師の主體的な学びの姿を通して、子どもと教師が共に学び、共に育ち合う関係性を築いていきます。

3 研究の内容

(1) 研究教科

- ・国語科と算数科に絞り、選択して研究する。

(2) 研究の視点

本校が目指す「学びをつくる学習者」を育成するためには、子ども自身が学びのプロセスを自ら回す経験を積み重ねることが不可欠です。そのエンジンとなるのが【AAR サイクル】です。

今年度は、この AAR の 3 つの段階に対応した「3 つの視点」から授業改善を進めます。最初から完璧を目指す必要はありません。先生方の「これならできそう」というワクワクを起点に、少しずつ子どもに学びの主導権を手渡していくことを目指します。

視点1 単元づくり【Anticipation：見通し】

～「ワクワク」から始まり、自ら問いをもって漕ぎ出すための支援～

単元の「入口」において、子どもが学びの目的や道筋を自分事として捉えられるようにします。教師がレールを敷き切るのではなく、子どもと共に学びの地図を描くことを大切にします。

- ・魅力ある学習課題づくり（子どもが自分の問いを持ち、学んでいこうと思える課題を設定する。）
- ・学習計画と付けたい力を子どもたちと共有
(教師が示す→子どもと一緒に作成→子どもたちで など段階を踏みながら、子どもも自らの学びを意識した計画を立てることをめざす。)
- ・教科の見方・考え方を働かす学習活動の工夫

視点2 学びの場づくり【Action：行動・協働】

～「自分らしさ」を発揮し、安心して試行錯誤するための支援～

単元の「プロセス」において、子どもが多様な関わりの中で自分の学びを動かせる場をデザインします。失敗やつまずきを歓迎し、学び合える「心理的安全性」を大切にします。

- ・「他者」「自分」「教材」との対話を通し、学びを深める。
- ・自己選択・自己決定の場を設定する。(学び方、学びの形態等)
- ・ICT の活用

視点3 学びのサイクルづくり【Reflection：振り返り】

～学びの足跡を見つめ、次の「やってみたい」を生み出す支援～

単に「楽しかった」で終わらせず、学びを振り返って次のステップへと繋げる“連続性”をつくれます。この R（振り返り）が、次の A（見通し）を生み出す鍵になります。

- ・振り返りを通し自分の学び方を批判的に見つめたり、新たな問いを見い出したりして、次の学びにつなげる。(学びの連続性)

4 研究の方法

(1)授業研究会の実施

- ・事前研究会の実施、教材や指導法の開発・工夫と検証

(2)カリキュラムマネジメント表の作成

- ・年間のカリキュラムマネジメント表を年度初めに作成する
- ・実際に授業をやっていき、単元の配列や教科間のつながりを、毎月加筆修正していく。

(3)研究全体構想図の作成

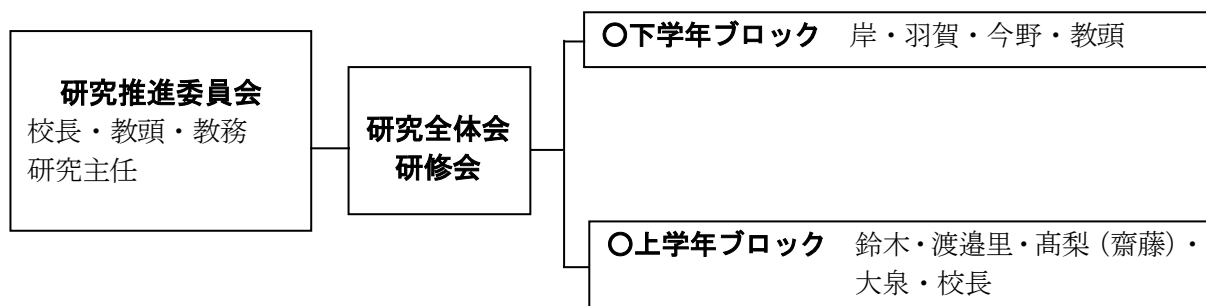
研究の視点に沿って、授業実践を積み重ねる。授業研究会や日常の授業の中での子どもの姿を見取り、それぞれの視点に沿って有効であった手立て等を追記・修正していき、全体構想図を作っていく。

(4)授業研究会

研究について共通理解するために、各学級1回の授業研究会を行う。事前研究会はブロックで行う。事後研究会は全体で行う。

◆第1回授業研	7 / 1 (水)	4・5年	2・3年	指導主事要請
◆第2回授業研	9 / 4 (金)	6年	1年	指導主事要請
◆第3回授業研	11 / 25 (水)	4・5年		指導主事要請
◆第4回授業研	12 / 9 (水)	さくらんぼ学級	せせらぎ学級	指導主事要請

5 研究の組織



6 研究全体構想図

